

今さら聞けない資機材の使い方

〔第11回〕緊急自動車の走行について

菅原 雄樹

(釧路北部消防事務組合
鶴居消防署)

日頃、私たちが一番よく使用している資機材と言っているかわかりませんが、間違いなく使用している物があります。そうです、消防車や救急車といった緊急自動車です。緊急自動車は私たちが活動を行う上でなくてはならないものです。

そこで今回、緊急自動車の走行での注意点とヒヤリハットについて書きたいと思います。

鶴居村の紹介

私の住んでいる鶴居村は北海道の東側にあります。中核都市である釧路市から約30km内陸に位置しており、気温は釧路市に比べ、夏は5℃程高く道東では珍しく30℃近い日が続きますが、冬は釧路市に比べ5℃程低く寒さの厳しいところです。

また、村の一部には雄大な釧路湿原を抱え、冬になると美しい丹頂鶴が餌を求めて飛来します。

救急事情としましては、村内には救急医療に対応した医療機関がなく、95%以上は釧路市へと搬送しているのが現状です。

1 緊急自動車とは

道路交通法第39条の規定により「消防用自動車、救急用自動車その他の政令で定める自動車で、当該緊急用務のため、政令で定めるところにより、運転中のものをいう」とされており、火災現場へ行ったり、救急現場へ行き病院に搬送するために運転中で、かつサイレンの吹鳴及び赤色灯の点灯により、誰の目から見ても分かるのが緊急自動車です。

この要件のうち、サイレンの吹鳴や赤色灯の点灯を忘れてしまうと出動中でも緊急車両とみなされないのが注意が必要です。

・法令上の特例

緊急自動車には幾つの特例がありますので何点か紹介します。

① 右側通行の特例

一般車両は原則、全て左側通行です。しかし、緊急自動車については「止むを得ない必要があるときは、道路右側部分にその全部又は一部をはみ出して通行できる」と規定されています。

この特例は、「いつでも右側通行できる」という訳ではなく、飽くまでやむを得ない必要がある場合のみです。

② 停止義務免除の特例

一般車両は、踏切、赤信号などでは停止しなければなりませんが、緊急自動車については「法令の規定により停止する場合においても、停止することを要しない」となっており、一時停止することなく通行することができます。

しかし赤信号を減速もせずに走行すれば交差車線の車に衝突されることはほぼ間違いありません。特例はあるものの一時停止は必要と考えましょう。

2 実際に走行する際の注意点

① 出動時の注意点

・引きずられる黒いホース（写真1）

朝の始業点検中の救助出動での失敗談です。通報が入り自身の装備を整え車両に乗り込み車庫から出た瞬間、他の職員が大声で停車を叫んでいたため、車両を停車さ



写真1 黒いホースの正体。排気ガス排煙装置

せ確認したところ千切れた排気ガス排出設備のホースが
つながっておりました。

☆注意すべきポイント

- 出動車両の各部シャッターが閉まっているか
- 資機材等の積み忘れはないか
- 車庫や車道に出るときに歩行者等がいらないか
- 排気ガス排出設備、車両止めを外し忘れていないか

② 走行時の注意点

• 緊急車両なのに抜かされる

北海道の道路は本州などに比べ道幅が広く、そして車
が渋滞する程走っておらずスピードが出しやすい環境で
す。そのため速度が80 km/hで走行している車両が
たくさんあり、緊急走行中でも追い越されることがしば
しばあります。

☆注意すべきポイント

• 走行（制限）速度の遵守

緊急自動車にも制限速度はあります。一般道は時速80
km、高速は時速100 kmです。どんなに焦っていても
制限速度を念頭に置いた冷静な運転を心掛けるべきです。

3 動物に対する注意点

• カーブを曲がると鹿が（写真2）

緊急走行にて傷病者宅へと奥深い山道を走行していた
ときのこと、見通しの悪い左カーブを曲がった瞬間に、
立派な角をもった雄鹿が道路側溝から飛び出してきたた
め、慌ててハンドルを操作し急ブレーキを踏むも接触。
幸いにもバンパーにヒビが入る程度で済み搬送には支障
ありませんでした。



写真2 エゾシカ。写真の鹿は子供ですが成獣の雄では
2mを超す体長に角が加わります

☆注意すべきポイント

- 動物注意の標識がある場所（写真3）
- 動物が離れたと思って油断しない
- 1頭だけだと思わない
- 秋は特に注意が必要

道路脇から動物（鶴居村の場合は鹿、丹頂鶴、キツネ
etc）が飛び出してくることがあります。動物が良く通過
する場所には標識が設置されていますので、歩行者注意標
識と同様に動物の飛び出しに注意が必要です。また、鹿の
場合、車両から遠ざかる動きを見させても再び車両に向かっ
ての方向転換や、1頭が通過し安心すると違う鹿が飛び出
したりと気が抜けません。

秋頃から鹿の毛色が周囲の景色と馴染んで見えづらくな
るため、一層の注意が必要となり、動物の飛び出しが多い
場所ではあらかじめ速度を落として走行します。



写真3 動物注意

4 前後車両への注意点

• 「後からついて行きます」には要注意

救急搬送で家族が「後からついて行きます」と言われ
た場合の大半は言葉のとおり、救急車の後ろにピッタリ
とついてきます（写真4、5）。

傷病者宅から家族の車両が救急車にピッタリとついて
きていることが気になり前方の車両との車間距離を詰め



写真4 車間距離が短いと



写真5 サイドミラーではこのように見えます

過ぎてしまい、救急車に気付いた前方車両が慌てて急ブレーキを踏み、それに合わせ救急車も家族の車両も急ブレーキを踏みました。間一髪で救急車が前方車両を追い越すことができたため多重衝突とならずに済みました。

それ以後は、当たり前のことですが前方車両との車間距離を保つこと（写真6、7）、家族が「後からついて行きます」と言った場合は、法定速度を遵守し走行するようお願いします。

☆注意すべきポイント

- 運転者が女性、初心者、高齢者
- 適正な車間距離を保つ
- 過度のアナウンスやパッシングはしない



写真6 適正な車間距離では



写真7 サイドミラーではこのように見えます

最近の車は気密性やオーディオ機器の性能向上によりサイレン音が聞こえにくく、緊急車両に気付かないことも度々あります。

気付かれない焦りから車間距離を詰め過ぎたり、マイクによる過度のアナウンス、パッシングで気付いた前方車両の運転手が慌てて急ブレーキをかけたりしますので飽くまで適正な車間距離を保つことが大切です。

また、運転手が女性、初心者、高齢者の場合は、予期せぬ運転（急停止、坂の頂上やカーブの真中で停車）をすることがあるため、高齢者・初心者マーク（写真8）の確認や運転手の外見から判断し、予期せぬ行動をおこす可能性（写真9）を考慮し走行すべきです。



写真8 高齢者・初心者マーク



写真10 見通しの悪いカーブで停車している車

5 現場での注意点

① 路上に電線が落ちている

交通事故現場へ出動し、現場へ近付いたときのことで。事故車両に気を取られてしまい何かを踏んだ感触がありました。車両を停車させ状況確認するため周囲を見渡した

ところ電柱から黒い線が垂れ下がっており、これを踏んでしまったようです。

この黒い線の正体は「電線」ではなく「電話線」でした。

☆注意すべきポイント

- 路上に落ちている物は踏まない
- 車内に虫を入れない（入らせない）

事故現場では路上に破損物が散乱しており、時には電線などが路上にある場合があるため路上及び周囲の状況を確認して近づくこと。

また、車内に虫（蜂やアブ）が進入しないよう車両ドアの開閉は最小限にします。

② 冬道での注意点

• センターラインに残る雪

その日の路面状況として除雪はされていたものの、センターライン付近に雪が残っていました。前方の待避車を追い越し、自車線へ戻ろうとした際に雪にハンドルを取られ、車体が左斜め45度を向いたまま体勢を立て直すことができない状態となりました。しかも、対向車が来ていたためこのままでは衝突するのが目に見えておりましたが、運よく雪のない場所があったため間一髪のところ自車線へと戻ることができました。

• アイスバーンで操作不能

しばらく降雪のない日が続いていたある日の出勤のこと、スケートリンクかと思間違うほど綺麗なアイスバーンの路面。非常に危険と判断し、時速30～40kmで走行していましたが急にハンドルが軽くなりました。やはり滑り出したかと思い優しくブレーキをかけましたが全く効かず、4WD車であるためアクセルを踏みましたがタイヤは空しく空転します。

結局、そのまま15m程滑りカーブ手前で滑り止めの砂が撒かれており事なきを得ましたが、滑り止めの砂がなかったらと考えただけでもゾッとします。

車両が雪を押しつぶすことにより雪は圧縮され氷となります。この状態をアイスバーンと呼び、非常に滑りやすくなります。また、坂道でのアイスバーンが非常に厄介で、大型車両（消防車、トレーラー）が坂道で一旦停車すると登坂することができないことがあり、下手をすると平坦な場所まで滑り落ちることもあります。

アイスバーンの対応策として各車両に砂を積載しております。

• 雪山の陰から丹頂鶴が（写真10）

年もあけた1月の早朝出勤からの帰署途中のことです。除雪時にできた雪山が道路脇に何個もできており特段珍しい光景でもありません。ある雪山に近づいた瞬間、丹



写真10 鶴居村に多く住む丹頂鶴

頂鶴が道路へと出てきました。丁度、雪山の陰になっていたため気付けませんでした。冬道のため救急車のスピードがそれほど出ていなかったため丹頂鶴を轢くことなく済みました。

冬になると鶴居村の至る所で見かけることができる丹頂鶴ですが「特別天然記念物」に指定されており、轢いてしまった場合は文化財保護法違反で5年以下の懲役又は20万円以下の罰金となります。

冬道での走行は特に注意が必要であり、速度を落とし夏道よりも長めの車間距離（夏期間よりも長く）を保つこと。

右側車線にはみ出す場合は、センターラインの雪が少ない所を選びます。これはセンターライン付近の雪にハンドルをとられにくくするためです。

除雪でできた雪山の陰から人や動物、車両の飛び出しがあることを念頭におき走行すべきです。

☆注意すべきポイント

- 路面状況（アイスバーン、ブラックアイスバーン等）（写真11）
- センターライン付近の雪
- 除雪でできた雪山（写真12）



写真11 アイスバーン状態の路面



写真 12 除雪でできた雪山

• 地域による気温差にも注意

朝の救急出動中のことです。鶴居村内を走行中はアイスバーンでありましたが気温も低くスリップすることなく走行できていましたが、釧路市内に入ると道路表面が溶けだしていたためスリップして対向車線にはみ出てしまいました。幸いにも対向車がきていなかったため事故にならず済みました。

氷が滑る原因は「氷の上に水の膜ができる」ことにあります。鶴居村は前述のとおり、釧路市との気温差が約5℃あるため、地域における気温差や出動中の時間経過による路面変化を考慮し走行すべきです。

③ 車両の死角、見落としに対する注意点

• 走行車線変更の際の死角

病院からの帰署途中のこと。左側車線へと変更するためミラーで車両がないことを確認し左へ変更し始めたところ、隊長から「左に車がいるぞ」と言われました。

機関員からは死角となり見えていなかった車両が、補助ミラーにはしっかり見えており事故を起こさずに済みました。

• 交差点での見落とし

釧路市内の片側3車線の交差点へ進入し、隊長席からは「左はOK」と呼称がありましたが、自分自身で左を確認したところ大型車両の陰からタクシーが来ていました。隊長が確認した瞬間は大丈夫であるかのように見えても、実は見落としとしていたということがあるので、自分自身でも再度確認する必要性を感じました。

助手席に座る人は補助ミラー等を活用し、機関員の死角となる部分のカバーし、呼称確認をしましょう。また、機関員は助手席からの呼称確認+自らも再度確認を行うことも大事です。

車両後退時、原則として左斜め後方に隊員1名を配置しましょう。もし機関員1名のみで後退させる場合は、バックモニターの活用をお勧めしますが、バックモニタ

ーは飽くまで補助的なものであり車両後方しか確認できませんので、必ず車両を降りて周囲を確認してから後退させましょう。

☆注意すべきポイント

• 走行中の場合

補助ミラーの活用 (写真 13)

ダブルチェック

• 車両後退時の場合

隊員1名を配置

バックモニターの活用 (写真 14)



写真 13 補助ミラーに車が写っています。サイドミラーではよく分かりません



写真 14 バックモニターも活用します

④ 車両の揺れに対する注意点

これは救急車の場合になりますが、住民の方は救急車の乗り心地は良いものだと思いますが乗り心地は正直良いものではありません。これは後ろに乗っていると良く分かります。

機関員はこのことを考慮しなければいけません。機関員が感じる僅かな振動は後部(患者室)では大きな振動となり、ブレーキやカーブでの荷重移動も傷病者の負担となりますので、早めに優しく弱く徐々にブレーキをかけること、傷病者の状態(骨折等で痛みがある場合)を考慮した運転

を心掛けるべきです。また、帰署する際には実際にストレッチャーや関係者と同様に座ってみて、傷病者がどのような振動を感じるかを体験しておくの良いかと思います。無論、急ブレーキや急発進、急ハンドル、「急」のつく動作はもってのほかです。

例えるならばリムジンを運転しているかのようにです。

☆注意すべきポイント

- わずかな振動、実は大きな振動
- 荷重移動は負担
- 「急」のつく動作

⑤ 交差点での注意点

「停止義務免除の特例」があるにせよ赤信号の交差点に進入する場合は一時停止してから進入することが大事ですが、ここで注意してほしいことは「交差点に入る直前に一時停止する」ではありません。

緊急車両が気にする必要があるのは何も車両ばかりではありません、横断歩道を渡る人にも注意が必要であり、待避車両がいる場合はその陰に歩行者がいるかもしれないため、横断歩道手前でも一時停止し歩行者がいないことを確認（写真 15）、次に交差点に進入してくる車両を確認し交差点を通過します。

また、信号の変わり目では、スピードを上げて通過してくる車両がいるため注意が必要です。

☆注意すべきポイント

- 横断歩道手前で一時停止
- 待避車両の陰
- 信号の変わり目

⑥ 帰署する前に車両のチェック

• 救助資機材の紛失

夜間の救助活動終了後に資機材を撤収し帰署しましたが、帰署後の資機材チェックで救助資機材が1個ないこ



写真 15 車だけでなく車の影の人にも注意します

とに気づき、翌早朝に現場へ行き資機材を無事発見することができました。

• シャッターが開いたまま現場引揚

夜間出動した現場を引き揚げ、しばらく走行していると車両の左後部が明るいことに気づいたため停車し確認したところ、資機材収納庫のシャッターを閉め忘れていました。消防資機材は高価な物が多く紛失したものがなく安堵しましたが、帰署前（引揚時）の車両チェックの重要性を改めて感じました。

次に掲げるポイントに異状がないか車両を1周し確認すること。また、現場等に資機材を忘れていないかも確認すべきです。

☆注意すべきポイント

- 資機材の撤収状況
- 資機材収納庫のシャッターの開閉状況
- 車両のボディ、ライト、タイヤの異常

⑦ 公用車の運転に対する注意点

現場や病院から消防署に戻るときは、サイレンの吹鳴も赤色灯の点灯もしていないため「緊急車両」から「公用車」となります。

緊急走行中であれば緊張感を持っているため、適正な運転ができるのですが、活動が一段落したことで気が緩み自家用車の運転となりがちです。

特に若い職員（運転年数の浅い職員）は、車線変更する際のウィンカー作動時間が短かったり、車間距離が詰まりすぎていたりが見られます。

そのような運転にならないためにも、日頃から自家用車でも公用車同様に安全運転を心掛けることを若い職員には指導しています。

☆注意すべきポイント

- 緊急走行していない＝公用車
- 車線変更時のウィンカー作動時間
- 車間距離
- 地域住民から常に見られている

⑧ 安全運転に対する取り組み

• 交通安全運動への参加

当署では毎年、北海道、北海道警察などが主催し交通事故・違反の抑止対策に効果の高いセーフティラリー北海道に参加し、安全運転に対する意識啓発を行っております。また、セーフティコーンを使用してクランクや狭隘な道路状況を作り走行訓練を行い運転技術の向上に努めています。

・情報の共有

工事等による通行止めや、道路の段差等の異常個所を外出等を利用して確認を行い情報を共有することで搬送時間のロス、段差等でのスムーズな運転を行うことができるかと思います。

・機関員の負担軽減

機関員の負担を軽減するために「走行距離、時間、件数」などにより適宜交替することをおすすめします。

私の所属では引揚から帰署まで別の職員と交替しています。帰署途中に出動要請が入れば現場から交替することになります。

また、車両ガラスの汚れや、ワイパーゴムの劣化などによる視界不良は非常に機関員のストレスとなりますので常に綺麗にしておくべきです。

☆安全運転へのポイント

- ・交通安全運動（セーフティラリー）への参加
- ・走行訓練
- ・情報の共有（通行止め、道路の異常）
- ・機関員の交代

6 最後 に

最後になりますが、今回挙げたポイントは全て「当たり前」のことです。

私たちは「地域住民の生命、身体及び財産を守るため」において、多様な現場へ赴き活動を行います。その私たちが「当たり前」のことをできていなければ、緊急車両が現場へ到着することができませんし、そんなことがあってはならないことです。

そのためには今一度自分が勤務している所属にある車両の構造、特性の把握、熟練機関員による指導やヒヤリハットの経験談、走行訓練を行い、知識・技術の研鑽に励み緊急自動車を安全に運行するように努めていただきたいと思います。

今回は「自動式人工呼吸器」の予定です。

著 者

名 前：菅原 雄樹

所 属：釧路北部消防事務組合
鶴居消防署

出 身：釧路市

消防士拝命：平成 11 年 4 月 1 日

救命士合格：平成 22 年

趣 味：スノーボード、柔道

シリーズ構成

松本直樹（留萌消防組合消防署）

監 修

中路和也（留萌消防組合消防本部）



イラストで読む

詳解心肺蘇生法

（ガイドライン 2010 対応）

■玉川 進 著（国立病院機構旭川医療センター）

B 5 判／104 頁（2 色刷） 定価 1,260 円



◆ガイドライン 2010 で改正された心肺蘇生法と窒息解除法に焦点を当て、救命講習で指導をされる方のために、受講者の疑問、質問に平易に答えられるように、イラストとグラフで方法と理論を紹介した応急手当指導者用テキスト！

